駒場友の会

会報第11号

「教養学部長とご父母との懇談会」報告

恒例の「教養学部長とご父母の懇談会」が五月十七日（土）に開催されました。

駒場友の会発足以前はご父母と学部教職員が懇談する機会がなかったことから、駒場友の会主催のイベントとして、会友になっていただいた新入生のご父母を対象に開催しているものです。第三回目となる今回は、二百名余りの方々が参加され、年々盛会となってきています。

今年からの会場となった九〇〇番教室で、十時三〇分にヘルマン・ゴチェフスキー先生によるパイプオルガン演奏で始まり、小島憲道教養学部長による講演「駒場の魅力」が行われました。

講演で小島学部長は、教養学部の発展の歴史を辿りながら現在における教養教育の意味と魅力について力を込めて語られました。化学を専攻されたご自身の若き留学時代の思い出を交えながらのお話に、ご父母の方々は大いに興味をそそられたようでした。

その後、引き続きキャンパスツアーが行われました。キャンパスツアーでは、小島学部長、木村秀雄副学部長をはじめとする教員二〇名が、それぞれ参加者十名ほどを引率して、図書館、講義棟（一号館、五号館）、課外活動施設（コミュニケーション・プラザ北館等）、美術博物館、教員研究室等にご案内しました。一号館時計台に登るツアーはとくに好評でした。

懇親パーティは十二時三〇分から、駒場コミュニケーション・プラザ二階（生協食堂）で開催されました。小島学部長の挨拶・乾杯のあと、教職員とご父母との和やかな歓談で会場は大いに盛り上がりました。その場で指名されたご父母の方々からのスピーチもあり、皆さんがなごやかな一日を過ごされたことと思います。

【参加されたご父母からの声】

子どもの大学に行って見学するということは、他の大学ではなかなかないので、とてもよかった。

期待していた以上の内容でした。先生方の案内付きで見学できたことをとてもうれしく思います。大学と保護者の距離がとても近くなった気がしました。

学部長先生のお人柄がわかるお話、オルガンの演奏、キャンパスツアーなどを満喫しました。大学では父母のお知り合いはできないと思っていましたが、いろいろな方とお知り合いになれ、駒場友の会に入会してよかったと思いました。

駒場友の会第五回演奏会

五月二四日（土）十五時三〇分より、駒場コミュニケーション・プラザ北館・音楽実習室で、駒場友の会主催第五回演奏会「混声合唱の楽しみ」が開かれました。

春の演奏会は、昨年度より友の会の総会の日にあわせて開催しており、総会に出席される会員・会友の方々に音楽を楽しんでいただく趣向です。

演奏は、東京大学柏葉会（はくようかい）合唱団。男声は東京大学、女声は東京大学と近郊の大学の学生からなる総勢百二〇名の混声合唱団で、一九四九年に創立されて以来つねに駒場キャンパスを本拠として活動してきました。学生合唱団としての質の高い演奏と社会貢献が認められ、二〇〇五年に総長賞を受賞しています。

当日のプログラムは以下の七曲でした。

一　柏葉会歌（柴田南雄 曲／田中司 詩）、二　鴎（木下牧子 曲／三好達治 詩）、三　ヒスイ（信長貴富 曲／寺山修司 詩）、四　菜の花（福士則夫 曲／菅原克己 詩）、五　高原列車（木下牧子 曲／今成敏夫 詩）、六　幸せ（F・メンデルスゾーン 曲／J・アイヒェンドルフ 詩）、七　ラプソディー・イン・チカマツ［近松門左衛門狂想］（千原英喜 曲）。

澄み切った美しい歌声と躍動感溢れる歌唱が会場に響き渡り、聴衆は、初夏の日の午後の豊かな時間を満喫しました。

「オープンキャンパス（駒場地区）」報告

恒例の東京大学オープンキャンパスが八月一日（金）に駒場地区で開催されました。駒場友の会では、参加の高校生に同伴してキャンパスに来られたご父母向けの企画として、駒場コミュニケーション・プラザ北館にて、教養学部についての説明会を開きました。

会場では、山本泰教授と兵頭俊夫教授が東京大学の教育の目的や現状についてパワーポイントを用いて説明し質疑を交わしました。百名を超えるご父母の方々で満員の盛況となりました。

第五回総会報告

駒場友の会総会は五月二四日（土）に駒場コミュニケーション・プラザ北館二階多目的教室で開催されました。一七時より本間長世会長の挨拶で始まり、来賓として、一高同窓会、東京高校同窓会、教養学部より祝辞を頂戴しました。以下、総会の式次第に従い、議事の内容を報告します。

（一）二〇〇七年度事業報告

瀧田佳子理事より以下の報告がありました。

①懇談会・講演会・演奏会などの開催。

新入生の父母と学部長の懇談会（五月十九日）。新入生の父母二〇〇名を招き、小島学部長の講演「駒場の魅力」、キャンパスツアー、懇親パーティを実施。

高雄有希ピアノ演奏会（五月二六日）。駒場友の会主催の第三回演奏会。百二〇名参加。

「テノーレス・ディ・ビッティ　コンサート：地中海の歌声／アカペラの醍醐味」（六月二日）。主催は「創造の広場イタリア」実行委員会。駒場友の会は、駒場美術博物館、東京大学消費生活協同組合と共催。

オープンキャンパス（八月二日）。駒場友の会は、参加した高校生の父母一〇〇名余りを一八号館ホールに案内し、学部説明、質疑などを行った。あわせて、「学生名手による特別演奏会」を開催。演奏者は、ピアノ：高雄有希（文学部）、チェロ：磯野太佑（経済学部）。ピアノ委員会との共催。

樹木を巡る講演とイベント（十一月十日）。東京大学ホームカミングデイの一部として、北海道演習林長の梶幹男先生（本学農学生命科学研究科教授、北海道演習林長）をお招きし、講演会「ブナ学ことはじめ」を開催。約七〇名が参加。教養学部に寄付した「駒場友の会」名入りの樹木プレートを、参加した会員とともに駒場コミュニケーション・プラザ周辺の樹木に取り付けた。

ユリア・チャプリーナ・ピアノ演奏会（十一月十四日）。駒場友の会主催の第四回演奏会として、ユリア・チャプリーナさんを招いてピアノ演奏会を開催した。曲目は「乙女の祈り」など。一二〇名が参加。

②会報の発行、ホームページの拡充

駒場友の会会報九号を八月に、十号を二月に発行。

③その他

正門修復募金の実施。老朽化した教養学部の正門門扉を学部が修復・復元するにあたって、駒場友の会は、会員会友、教養学部ベテラン会に寄付を呼びかけ、三八九名から合計三、四三四、〇〇〇円の寄付を頂戴した。この全額を国立大学法人東京大学に寄付し、すべての事業を完了。なお、駒場友の会会報第十号にご氏名を掲載後に寄付を頂戴した方々は以下の通り。薄葉徹郎、中澤恒子、萩原由美子、堀江淳子、宮川清（敬称略）。

④会員・会友数

二〇〇八年三月末日現在の会員・会友数は次の通り。終身会員六五名、会員四三五名、会友一、〇三八名。一高同窓会員百七三名、東高同窓会員一〇〇名。合計一、八一一名。

（二）二〇〇七年度決算報告

山本泰事務局長より決算報告（別表参照）があり、また木畑洋一監事より

2008年度駒場友の会予算案

収入の部　単位：円

		予算
1 会費収入		5,600,000
	11 通常会員会費	2,000,000
	12 会友会費	2,500,000
	13 終身会費	1,100,000
2 寄付収入		485,000
3 雑収入		27,000
	31 預金利息	25,000
	32 その他	2,000
小計		6,112,000
前年度繰越金		7,244,428
合計		13,356,428

支出の部　単位：円

		予算
1 印刷費		550,000
	11 会報・案内等の印刷費	350,000
	12 封筒・便箋等の印刷費	200,000
2 通信費		936,000
	21 郵送費	900,000
	22 電話使用料	36,000
3 事務経費		395,000
	31 事務用品費	100,000
	32 コピー機使用料等	120,000
	33 インターネット接続料	45,000
	34 会費振込料金負担分	130,000
4 人件費		1,280,000
	41 事務局スタッフ	1,100,000
	42 臨時	180,000
5 運営費		985,800
	51 事務室借料	235,800
	53 光熱水料	50,000
	52 会員証作成費	550,000
	54 その他	150,000
6 事業費		1,900,000
7 予備費		65,200
小計		6,112,000
次年度繰越金		7,244,428
合計		13,356,428

2007年度駒場友の会決算報告書

収入の部　単位：円

		予算	決算
1 会費収入		5,600,000	4,834,100
	11 通常会員会費	2,000,000	1,556,000
	12 会友会費	2,000,000	2,678,100
	13 終身会費	1,600,000	600,000
2 寄付収入		500,000	389,752
3 雑収入		12,000	173,133
	31 預金利息	10,000	2,133
	32 その他	2,000	171,000
小計		6,112,000	5,396,985
前年度繰越金		7,529,033	7,529,033
合計		13,641,033	12,926,018

支出の部　単位：円

		予算	決算
1 印刷費		400,000	517,205
	11 会報・案内等の印刷費	250,000	340,805
	12 封筒・便箋等の印刷費	150,000	176,400
2 通信費		936,000	931,917
	21 郵送費	900,000	891,877
	22 電話使用料	36,000	40,040
3 事務経費		495,000	395,150
	31 事務用品費	100,000	149,330
	32 コピー機使用料等	220,000	86,066
	33 インターネット接続料	45,000	48,190
	34 会費振込料金負担分	130,000	111,564
4 人件費		1,080,000	908,626
	41 事務局スタッフ	1,000,000	898,626
	42 臨時	80,000	10,000
5 運営費		1,235,800	1,259,371
	51 事務室借料	235,800	233,800
	53 光熱水料	50,000	43,452
	52 会員証作成費	800,000	365,131
	54 その他	150,000	616,988
6 事業費		1,700,000	1,669,321
	61 5.19 父母との懇談会		160,210
	62 5.29 高雄さん演奏会		139,815
	63 8.2 オープンキャンパス		91,920
	64 11.10 ホームカミングデイ		346,290
	65 11.14 ユリア演奏会		476,150
	66 その他		198,900
	67 正門募金会計に移算		256,036
7 予備費		265,200	0
小計		6,112,000	5,681,590
次年度繰越金		7,529,033	7,244,428
合計		13,641,033	12,926,018

決算報告書が適切である旨、監査報告がありました。

（三）二〇〇八年度事業計画

瀧田理事より今年度の事業計画について説明がありました。

懇談会・講演会・演奏会などの開催。①新入生の父母と学部長の懇談会（五月十七日）②柏葉会演奏会（五月二四日）③オープンキャンパス（八月一日）④南米マンドリン音楽演奏会（十一月一日）⑤駒場の樹木を巡る講演とイベント（十一月十日のホームカミングデイの催し）。

会報の発行、ホームページの拡充。駒場友の会会報は十一号を八月に、十二号を二月に発行予定。

（四）二〇〇八年度予算案の承認

今年度予算案（別表参照）について事務局長より説明があり、承認されました。費目等の内容は昨年度とほぼ同じですが、会員・会友数の増加に伴い収入支出とも増えています。

（五）役員選出

理事の任期が五月三一日で満了となることから、会長、理事、監事の選出を行いました。新しい役員体制は左記の通りです。任期は二〇一〇年五月三一日まで。

会　長　毛利秀雄
副会長　竹田晃、遠山敦子
理　事　浅野攝郎、風間勝昭、桂利行、小島憲道、小林寛道、瀧田佳子、辰野裕一、蓮實重彦、松本健
監　事　木畑洋一、佐藤紀志雄

（六）その他

嘉治元郎副会長より、駒場友の会は、一高同窓会との連携をさらに深め、今後その活動の一部を担う計画について協議し、合意に達したとの報告がありました。

以上の議案の審議・承認をすべて終え、総会は予定通り十八時に閉会となりました。

駒場――来し方、そしてこれから

毛利　秀雄

このたび教養学部の象徴的存在であり、また一高のご経験もある本間長世前会長の後を受け、「駒場友の会」の会長をお引受けすることになりました。また新しい副会長には遠山敦子元文部大臣と竹田晃元教養学部長にご就任いただきました。お二人とも私にとっては元上司でもあった方々ですが、年令（竹田先生とはごくわずか）と文理の交代というようなことでこうなったとご理解ください。竹田先生には一高同窓会の担当もお願いしています。

さて昭和三十四年に私が五年間勤めた神奈川県油壺の理学部附属臨海実験所から移ってきた当時、私の属する生物学教室は時計台の一号館（戦後長く第一本館とよばれた）の裏にある木造平屋の建物でした。一高の寮や講堂、図書館などをのぞき、コンクリートの建物はほかには戦後建てられた元第二本館ぐらいで、そこに文科系の先生方の研究室や教授会室がありました。今はなき南寮は文科系や数学の先生方の研究室で第一研究室とよばれていました。予算も少なく、古くからの講座制の本郷とはすべてにおいて比べ物になりませんでした。

六十年安保の後、高度経済成長のおかげと、青木元事務部長の豪腕もあって、理科系の三号館（旧第三本館）をはじめコンクリートの建物がつぎつぎに建てられました。そして教養学部創設以来の文科系の教養学科に対して、昭和三十七年に理科系の基礎科学科が創設され、同時に両者の講座化が計られています。しかし今になってみると建物は安普請であり（最近耐震工事を実施）、講座には一部を除きわずかな新規定員しかつきませんでした。

戦後駒場は常に学生運動の場でしたが、昭和四十三年になると医学部の学生処分問題に端を発し、教養学部の学生も無期限ストを決議して全学が紛争に巻き込まれます。駒場のキャンパスも旧第八本館の封鎖やセクト間のゲバルトなど荒れに荒れ、翌年の入試は中止となりました。私も若手の助教授としてその中にいましたが、文科・理科のいろいろな専門の教官を擁する教養学部では、このような場合にも本郷に比べてより適切な対応がなされたと思います。当時の学生たちも年をとり、今や各界で定年を迎えようとしています。

その後教養学科は三科となり、基礎科学科も二科となりました。さらに大学院重点化で今日のような形に整理されています。私が学部長を務めた昭和六十二年から平成元年の間にもいろいろなことがありましたが、駒場にとっての一つの大きな転機は、私が学部長をやめた直後におこなわれた総長選挙において有馬朗人先生と本間先生が同票・くじ引きになったことであったと思います。この結果を受け物理学者にして俳人でもある有馬総長が教養学部を重視されたこともあり、その後駒場は建物も含め充実の一途を歩み続けました。矢内原先生以来の総長にも駒場から蓮實重彦先生がなられました。他大学が教養部を廃し、その結果今日の、ある意味の知の荒廃を招いたのと好対照です。

今や駒場には立派な高いビルが立ち並び、取り壊された寮の跡にはコミュニケーション・プラザができあがって、外国の一級の大学のキャンパスにも引けをとらなくなりました。私たちOB

毛利新会長のプロフィール

成蹊高等学校（旧制）出身、東京大学理学部動物学科を昭和二十八年卒業、平成三年本学退官後放送大学副学長、岡崎国立共同研究機構・基礎生物学研究所長、同機構長を経て退官、現在国際生物学オリンピック日本委員会委員長、生殖生物学（精子に関する研究）で紫綬褒章。

にとりましても嬉しいことですが、カリキュラムの充実と共にこれから入ってくる学生諸君にとっても自らを磨く絶好の時間・空間を提供することでしょう。「駒場友の会」の皆様方にもこのようなキャンパスを楽しんでいただくとともに、皆様方のお力を有意義な行事に役立てることができればと考えています。

会長退任にあたって

本間　長世

私は今年の五月をもって、創設以来二期務めた駒場友の会会長を退任いたしました。

大任を果たしてほっとしているというのが実感ですが、実際は、私自身は無為無能で、理事の方々、事務局、教養学部教職員、篤志家など多方面の方々のお力によって、駒場友の会という性格に曖昧さを残したまま出発した組織が、会友の皆様のご支援もいただいて、次第に活発な活動をするに至ったのであります。

私は、アメリカ大統領の任期も、連邦憲法修正条項によって二期八年と定められているのだから、駒場友の会会長の任期も原則として二期どまりとすべきであり、原則は尊重しなければならないという大義名分を掲げましたが、会員の皆様のご同意を得ることができまして、嬉しく思っております。

私は、神田学士会館の運営を活動の中心とする社団法人学士会の評議員を務めております。学士会の役員は、旧七帝大が新制大学に移行して続いている大学の卒業生が会員となっていることから、教養学部第一期生の私より年輩の会員は旧制出身であるわけです。今年六月に開かれた評議員会の出席者名簿を眺めると、名前の下に学部・大学・卒業年・専攻分野が略語で書かれています。当日の出席者の中では、東大を昭和十五年に卒業された方が最年長でした。

教養学部卒業生は私一人で、専攻分野は教養となっていました。船舶とか、溶接とか、冶金などというのと並んで、私は教養を専攻したことになっていたわけで、これにはある種の感慨をおぼえました。

教養学部教養学科を創設するため力を盡くした先生方は、消滅する旧制高校の教育の良き精神を残し、新しい学問分野を切り開き、読み・書き・話す外国語を身につけ、専門化を急がず広く学び、再生日本の各分野でリーダーとなるべき人材を育成する少数精鋭教育を目指しておられました。

私は、地域研究の中のアメリカの文化と社会を集中して学ぶグループに属しましたが、第一期のころは基礎科目も専門科目も数が揃わず、六十名の学生の横のつながりも密だったと思います。日本思想史から西洋思潮まで、文字通り広く学んだのですから、教養を専攻したということにしても許されるかもしれないという気がしたのは、学士会評議員出席名簿に触発されただけでなく、最近リベラル・アーツの教育の重要性が強調されるようになったためかもしれません。

私の場合は、教養学部卒業後米国に留学し、内村鑑三が学んで総長先生の人格と信仰に打たれたというアマースト・カレッジで、アメリカン・スタディズを専攻しました。

アマーストはリベラル・アーツ・カレッジの名門校で、私にとっては教養学科の延長のような感じがありましたが、ここで私はアメリカの歴史・社会・文化を総合的に学び、研究し、アメリカ理解を深める訓練を受けることができました。

一高の校長だった新渡戸稲造は、「アメリカ研究の急務」と題する小文を一九一九年に発表し、日本人は外交官や軍人をはじめとしてアメリカは物質主義の国だと軽蔑するが、これはとんでもない間違いであって、アメリカを同情をもって深く理解することが、日本人にとっての急務であると警告しました。しかし、日本はアメリカを深く理解することなく戦争に突入してしまったのです。私は米国における日本研究の現状をよく知りませんが、日米相互理解を深めることは、両国にとっての急務だと思います。

アメリカの歴代大統領の多くは凡庸であり、あるいはそれ以下であることは、現に私たちが目撃しているところですが、傑出したリーダーも何人かは歴史に名をとどめています。リベラル・アーツの精神が、大局を見る目と、適確な判断を下す力を持つことである以上、駒場友の会への期待は大きいと信じます。

駒場友の会会報　第11号
2008年9月15日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電　話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メールアドレス
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページアドレス
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/
デザイン・印刷　株式会社双文社印刷
http://www.sobun-printing.co.jp

爽やかな風に包まれてゆったりと
くつろぐことのできる
フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場
駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさったコーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証をご提示下さいますと無料となります。
営業時間　11:00～14:30、17:00～21:00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内